

教団における教育の問題

— 仏教系宗立大学の現況について —

1

伝統仏教諸教団において宗立大学に対する期待はきわめて高くなっている。しかし各宗立大学の現状はそれに応うるに充分とはいえないし、教団からの要請の内容も問題なしとしない。教団における教育の問題、人材養成の問題は大学にのみ依存するのではなく、教団における多面的な対策を必要とするであろうし、そのためには問題を整理して研究しなければならぬであろう。教団における教育・研修の問題一般について調査する作業の第一歩として、今回は八宗立大学▽の問題についてふれてみようと思う。各教団においての宗立大学への期待はほぼ一致しているが、その期待の内容を集約的に表現しているものとして、真宗本

願寺派△宗報▽に掲載された川崎惠璋氏の論稿から、関係ある部分を少し長く引用してみよう。

「——学歴についてみれば、門信徒を教化する宗教家の資質として高度の専門的知識・教養が要求されることはいうまでもない。その期待に答えて寺院は高い教育をその子弟に与えてきた。そしてこの傾向は社会一般の教育熱に対応してより高い教育を与える方向を示している。(中略) 竜大でなく一般大学への進学が絶対数の少ない住職後継者の方に多く見受けられるのは、少しく気にかかる。坊守の教育程度については高女、新高が圧倒的に多いことが注目されるし、寺院の法務補助要員と目される衆徒の学歴は住職の後継者より低いことは当然のこととして受けとれる。宗門の人材が高い学歴をうけていることは、その発展にと

って喜ばしいことであるが、果してその専門的教育が将来宗教育家としての蓄積を目ざしているものであるかどうかについては疑問に思われるふしがある。若年層の宗教育家が減少し、僧侶としてでなく一般的な職業の専門知識を修得する傾向があることを考えるとき、宗門の前途に一沫の不安をもたざるをえない、この点に関して宗門で将来の発展のために宗門僧侶の養成に集中的な施策を行う必要が痛切に感じられる。宗門の理解者や協力者を育成することも大切であろうが、現状では宗門を担う中核に変化が起っていることに注目する必要がある。」(略)「宗門人材の養成という課題は宗門の特質からして諸問題のなかで最も重要であり、不断の努力と根気を必要とするものである。一般に宗教々団の人材養成には拡散と集中の二面が考えられる。宗門立学校で行われている人材養成などは、宗門の宗教々育を賦与してゆくという意味では拡散的側面といえよう。(略)宗門を担う人材の不足という点は集中的な側面である。(略)これらの人材は竜谷大学その他の宗門立学校で一定の単位を修得し宗門規定の研修をうけることによって養成される。(略)『竜大の教育効果の向上をはかれ』『竜大で寺門経営者として教養、宗務を身につけるため給費生として実習教育を行え』といった具体的提案を含む要請が

圧倒的に支持されている。大多数の宗門人は竜大の教育に對して極めて具体的な、教化の実践に役立つ人材の養成を期待されているように思う。もちろんこれらの期待は性急であってはならないが、学問の殿堂を誇る竜大の伝統的宗学にあっても、社会思想や社会科学の成果を受容して、実践教学の確立に一考する必要があるのではなからうか。竜大では学問としての宗学を教えるのであって説教や説教の仕方を教えるのではないという学問と実践とをきわどく分離させる議論がなされることがあるが、宗学の学問としての確立を強調することは認められるとしても、このような分離には、社会的現実から遊離することを危惧して理論と実践の問題を直視している社会科学以上に混同に対して警戒心があるように思う。実践教学の教授によって有為な実践的宗門人を養成することは竜大の宗門における大きな責務であるといえる。そして一方宗務当局においても将来の宗を担う寺院子弟に対して集中的な助成をする必要があるうし、その具体的な処置を希望する」(本願寺派△宗報▽36号「宗門寺院の現状と課題」)

このなかで指摘されているのは、後継任職となっていく若年僧の養成ということであり、教育内容として実践教学を確立し、△役にたつ僧職者▽を生みだす大学であって欲

しいという教団からの期待についてである。人材養成の問題は、各教団に共通した緊急の課題となつてゐることがこの論稿からも推察できるのである。また真宗大谷派においてこの問題に対する関心は本誌「書評」欄で小松師がとりあげているように八宗教エリート「教育の問題として具体的な検討が行なわれている。ここでは大谷派宗務総長副頼信雄師が、八真宗誌（78号）の座談会記事で述べている言葉を紹介しておこう。

「教団は——利益共同の会ではなく、社会的なつながりをこえた僧伽の会である。その僧伽を荷ない、僧伽を実現してゆくための人間をつくるということが人材養成ということでしょう。そのためには教団の使命が明らかに——長期にわたって——一年に一人でも、二人でも人材を生みだしていくことが大事でしょう。——大谷大学からは、今いったような使命を自覚し、そのために生涯をささげても悔いのないという人を一年に二、三人でもいいから、毎年生み出すという展望をふまえ——てゆくことですね。——いろいろな不満はあつても大学でそれをやってもらわなければならぬ。——学生、教授、建物というものによつて学校がなりたつてゐるのだが、一番問題は教授だ。それで——一つの方策として、仏教学、真宗学以外の哲学とか他

の学科の教授でも、仏教の信念をもつた人を探し出してやつていこうと思つてゐる。」本願寺派、大谷派の二つの教団のなかで、宗立大学に対する期待として人材の養成が強く主張されているが、これだけのわずかな文章のなかでも八人材養成として養成されるべき人材の八像に若干のずれがあることがわかるであらう。そのことは八報告Ⅱでも指摘している教団の姿勢として本質的な問題をはらんでゐるといえよう。

2

一般的な意味で大学が八学問の場として、本来あるべき八理念に立っているかどうか、八大学の理念そのものが確立できているかどうか、という問題が今日日本の大学のあらゆる場で検証されつつある。大学の理念は不安な状況に置かれ、常に危機をはらんでゐるのが現代である。その大学一般の状況のなかで、仏教系大学においては特に近代的な大学の理念の定着がおくれ、場合によってはそのことに対する反省も問題認識も持たない理事者が大学経営に当っている例もしばしば見うけられる。大学を大学として成立せしめることを避けては、教団の期待する現代に有効な人材の養成など不可能であり、その意味で、中世的性

格を脱皮できない教団からの期待は、場合によってはハ大
学Vを破壊しかねないものであろう。従って、教団からの
大学に対する期待のすべてを媒介項なしに大学につきつけ
ることは、ハ民主的Vなことでは絶対にならないし、教団が本
質的に、求めているものに対する応えともならないのであ
る。

まずこのことを前提として教団からの大学に対する期待
の内容を検討し、それに応える方途を求めねばならないで
あろう。真宗本願寺派の竜谷大学に対する期待のなかに現
われているハ実践宗学Vという考え方はハ実践神学Vとい
うキリスト教の発想からきた表現であらうが、その内容は
実はハ報告II V（第8図参照）のなかで教化活動家養成の
ための研修活動のカリキュラムで例示したようなものであ
る。ハ煩瑣哲学Vと称される真宗学の中世的論理をとびこ
えて、親鸞の教義を仏教学的理解で合理化し、それをハ実
践Vという実用性に結びつけるという操作で、ハ宗学Vの
内在している問題の解決になるであらうか。実用性を身に
つけることが、教団に役だつ人材の養成に応えることにな
るであらうか。どうもハ実践宗学Vという考え方はプラグ
マチックな問題意識に流されている傾向があるようにみえ
てならないのである。われわれは、これをハ近代主義的限

界Vとみるのである。教団人の人材養成の期待は、常にそ
うした実用、実利主義であることが多いのである。これは
教団発展を願う健全な期待ではなく、近代主義的思潮に毒
された教団人の頹廢の表現である。現代の問題に応えるとい
うことは、実用的布教家養成によって現代に適合してい
くことではなく、現代の根源的問題を超克することによっ
て日本の、あるいは人類の明日を開くことであって、その
ためにこそ、仏教は現代に再起しなければならぬのであ
る。一教団の繁榮衰微など、仏教の理念による現代の、超
克という課題遂行のうえで現われる結果でしかないであら
う。しかし役に立たない宗学を擁護しようというのではな
い。教団人や帰依者に対してはもちろんのこと、日本人全
体に対して普遍的な説得力のある親鸞なり、道元なりの教
義が開示され、しかも今日のあらゆる問題に対してその立
場からの理解と主体的な実践への挺となりうる教学II宗学
が求められるのである。少くともその実践者としての宗教
エリートを生み出すためには、いかなる私立大学にも劣ら
ないだけの普遍的であると同時に特殊な内容を備えた大
学をつくるのが目的とならなければならぬ。しかし教
団からの宗立大学への期待は、その点を飛躍して実用性を
求めているのである。他の専門的分野ならハ技術Vで解決

できるとしても、技術的に宗教伝道を理解した僧侶など、社会のなかに投げだされたとしても本来役にたたないことを知るべきである。まず第一に求められるのは、宗教家としての自覚と確信であって、そのためには現代の問題に対してまっとうにたちむかひうる認識の主体をつくりだすことである。近代主義の限界にとどまることは否定されるべきだが、現代の問題に応えていくための前提として、近代の意味とその限界を充分に理解し、その克服の問題を課題として自覚できなければならぬのである。現在の教団の状況にせよ宗立大学の状況にせよ、近代の意味を単なる合理的技術主義の限界のなかでしかとらえていないために現代教学への志向と、実践的課題とが分離してしまい、交差点が見失なわれていくのである。教学にせよ人材の養成にせよ、徹視的な教団の現状に應えていくのではなく、△現代∇の問題状況に迫るといふ姿勢を持つならば、教団の願う現実の諸課題にも応じていけるのである。宗立大学が経済・法律各部の増設によって宗教大学としての性格を稀薄化している現状も、教学からの現代の問題への主体的アプローチを欠いているからであって、宗義学や仏教研究の学部学科が、増大した学生数を擁する近代社会科学の諸学部

に圧迫されたり、コムプレックスをもったりしている現状

は、宗門の教義や仏教の現代的理念に対して、日本の歴史的現実が要請している大きな期待を受けとめることができず、課題認識を誤っているからである。このような現状でいかに人材養成の期待を描いてみてもむだであろう。そこからは伝道技術者は生れたとしても、日本の現実と教団の運命を担いける、宗教家なり僧職者なりは、生れることはできないのではあるまいか。

3

現代の社会において宗立大学とは一体何であるのか。日本国憲法に示されている学問の自由の保障と、「教育基本法」「学校教育法」のもとに成立している大学、そのなかの宗立大学とは一体何であるのか。今日宗立大学は一体どうあるべきなのか。このことを問うことは非常にむずかしい問題ではあるが、その点をぬきにして経営の即物的目的性に押し流されるならば、宗立大学が今日存在する意義を見失なうことになるであろう。

少くとも△近代∇に成立した△大学∇の理念をふまえたうえで、△宗立大学∇としての理念を求める営みをぬきにして、今日、宗立大学の方向を定めることはできない。伝統をもつキリスト教系大学と比較して、仏教系大学はあ

る意味では戦後になってあらためてその理念が問われているのであって、全く新しい経験に属するものであり、今こそ追求模索の努力をおこたってはならない重大な時期なのである。

伝統教団には△檀（談）林▽などの子弟教育の伝統はあるが、△大学▽という近代的な教育の場を理念として持つことはなかった。それは教団の歴史的性格を象徴的に表現しているのであるが、△檀林▽ではなく△大学▽となったのは主として外的要因とその規制によるものであって、近代的大学の理念を、宗立という名の下に問うことは今までになかったのである。

竜谷大学・駒沢大学・立正大学等の学部を増設拡大しつつあるところは、一様に一般大学化して——日本における特殊な経営主義的私立大学の運営——宗立としての本来の意義を喪失しつつあるというのが、いつわらざる現実であろう。このまま仏教系宗立大学としての理念とその実現への努力を放棄して一般大学のなかに解消していくならば、いにかえると経営の論理に蹂躪されていくならば、それは宗立大学の自殺行為に等しいであろう。

明治憲法下における大学自治と学問研究の歴史は、権力による弾圧・迫害によってけがされつつづけてきた。京都大

学滝川教授の学説をめぐって発生した京大事件、美濃部達吉教授の学説に関する天皇機関説事件などは、その汚濁に充ちた歴史にあらわれた氷山の一角にすぎないであろう。

われわれにとって身近な立正大学において、著名な社会学者であったK教授は、その弟子のS教授（当時は学生であった）に対して学問をしていくうえで三つのタブーを示したといわれる。それは「天皇・宗教・階級」の三つは絶対にくふてはならないというものであった。もしこのタブーを破るならば、学者として挫折せざるをえないことになるであろう、というものであったと伝えられる。治安維持法や出版法等による直接の学問研究への干渉・弾圧の外に、学者自身の手による学問研究活動の自己検閲によって、どれほど学問の発達が阻害され侵害されてきたかは、はかり知れないものがある。だがそれは明治憲法下における過去のでき事ではなく、現行憲法によって「学問の自由」が保障されているはずの今日においてさえも、国家権力によって学問研究の自由は常におびやかされようとしているのである。特に最近の教育行政に現われている反動化の傾向は、宗立大学の方途を決していくうえで充分に留意していかねばならない問題をはらんでいるといえよう。

あくまでも大学は、自立した理念によって支えられてい

かねばならないし、それによって学問の自由を保障し、偏見や抑圧を排除していかねばならないのである。

それは憲法によって保障されたものではあるが、宗立大学においては更に時代を超えた仏教の原理にもとずいて、独立自治の理念を基礎としなければならぬであろう。例えば「立正大学」建学の精神は、日蓮聖人の「立正安国」の精神に基いているものであって、ある意味では憲法の表現や世俗的現体制の理念を超えるものでなければならぬし、その限りでは「大学の自治・独立」と「学問の自由」「教育と研究の自由」はいかなる権力によっても侵害されるものではないはずである。またそうした理念に支えられてこそ、宗立大学の意義があるのであって、時代の潮流や権力の干渉等の、世俗の権威に押し流され侵害されるならば一般的な私立の大学と選ぶところがないであろう。また逆に、もし「学問の自由」「大学の自治・独立」と相反する「立正」の理念があるとするならば現代に「立正安国」の精神は甦ることはできないし、ましてそれを基礎とした「大学」など成り立ちうるものではない。「学問の自由」を絶対的に保障する宗立大学の理念の下でこそ、現代の真の伝道者・確信をもった宗教家・現代を克服する教学が生まれてくるのであって、独立・自治のない処で学問・教育が

行なわれたとしても、人材の養成であれ教学の確立であれ不能である。

しかし仏教系宗立大学においては、大学の理念の探求を軸として、人材の養成なり、現代教学の確立なり、教団発展の未来図なりを描く努力に缺けているといえよう。大学経営における経済性の追求や速成安易な実利的教育過程の編成などにのみ関心が集中して、本質的な問題を回避しているのである。

困難な時代状況に向って現在の宗立諸大学の現状は憂うべきものがある。大学を統率するものは当然のこと、すべての大学人は宗立大学の理念を自覚化していかねばならないし、そのためには広く大学の理念確立のための運動を起すべきである。

4

先にもふれたが小松邦彰氏が紹介している、大谷大学における「宗教エリート」の教育」についての問題提起は注目に値するであろう。しかし、宗立大学における教育の問題は、教団の中核となっていく「宗教エリート」の養成によつてのみ解決するものではない。一般社会で活躍する秀れた人材と、宗教家として教団を担っていくものが、相呼

応してこそ教団の発展があるのではなからうか。そして宗教エリートとはいふもの一般社会で通用しない、教団という温室のなかのみで有能であるという程度の人材の養成では、今後の教団を担うものとはなり得ないのである。教団にとどまる若年僧職者に対して、特殊な教育が必要であることはいうまでもないが、その前に一般社会人として有能な人材として十分な養成・教育がほどこされるべきである。「学問と高等教育」を実現する「宗立大学」の存在価値を示すためには、社会的人材の養成を先ずめざすべきである。一般的な教育のなかから、更に秀れたものが教団人又は若年僧職者としての特殊教育を受ける価値があるといえよう。人材の払底は教団にのみある現象ではなく、あらゆる社会機構の部に現われているのであり「宗立大学」の理念はそれに応うるに有効であらねばならない。教団を内外から支える人材の養成こそが教団にとって急務なのである。若年僧職者の養成という形にのみとらわれるならば教団の未来を拓く教育とはなり得ないということ、一般社会の要請に応える教育との、その相関関係を考慮すべきであらう。

他教団の大学は別としてもわが宗門と立正大学の将来を決するのは、このような一般的人材の養成にかかって

いると確信する。そのなかからのみ、教団の明日を担う若年僧職者が育っていくのであって、教団という温室のなかでのみ有効な人材では教団の未来を拓くことにはつなげていかないであらう。そのためには教団は挙げてこの問題ととりくむべきであるし、教団と一般社会からの要請にもとずいて、大学当局はそれに応うるべきである。

5

今回の調査は「立正大学」の機構や現状をひとつの基準にして、各宗立大学の組織やその他の特殊な条件などについて調べたものである。教団の教育・研修活動の総合的な調査を行なうための予備的な作業であった。例えば、八宗立の性格を大学の組織機構のうえでみるとそれぞれ若干の相違がみとめられる。それは教団の最近の歴史や特殊な事情によるものであるが、機構の面からだけみても理想的な状態となっているものは少ないのではあるまいか。

立正大学の現状は、近代化されているという面で機構は整備されているが、八宗立としての理念を正しく継承していくのには、更に一層の努力を集中していかねばならないであらう。そのためには教団の側からの認識を深める必要もあるし、それよりも大学に直接関係ある宗門人が八宗

立大学Vの理念とヴィジョンを見失うことなく追求していかなければならないのである。立正大学の現況は、大学の理念が不在であることから起っている混乱であるといえる。これは大学人すべての自覚と努力によって求められねばならないものである。

他大学の事情に関する資料の些細な検討の結果は、他日発表を期すことにする。なぜならば、その資料は宗立大学としての立正大学の問題を考えていくうえで様々な影響を考慮しなければならぬからである。

また一般化して参考とすることには若干の問題があるからである。

なお今回、仏教系諸教団の宗立又は関係大学として調査を行った大学は、仏教大学、花園大学、竜谷大学、大谷大学、駒沢大学、大正大学であった。